

## 三、歴史の始まり 律令国家の成立 II

### 飛鳥・奈良・平安時代から鎌倉・室町時代へ

#### 三・一 「歴史」とは・・・

かつて「史」の二文字で記され、「事件、出来ごと」を意味していた。

「歴史」を語ることは、人々の社会や文化を知ることであり、文字、文献、記録などの手段が必要になる。これらが出揃って歴史を語ることが可能になった時代は、「有史時代」といわれ、一方、それ以前は「先史時代」となる。では、日本の歴史は何時から、という問いについて考えてみたい。

「邪馬台国」の女王、卑弥呼の活躍が、三世紀に中国大陸の歴史書に記されていたが、その後の記録は消えた。五世紀になって、中国大陸と「倭の五王」との交流があったこと、また大陸の「宋」などに対して、倭国が九回朝貢したこと、が記されているのみで、四〜六世紀の歴史を語ることは困難だった。

中国で生まれた「漢字」が日本に伝来したのは四世紀、これを使いこなせるようになったのは、七世紀といわれているので、仏教が公式に伝来した六世紀の後半(古墳時代の終末期)、ようやく、「先史時代」との境いが出てきて、「有史時代」に移行した、というべきか、或いはシンプルに、日本の「歴史」は、仏教が大和に伝来したころ、とすれば、ストーリーはより明快になる。

#### 三・二 また、歴史の始まりは『日本書記』からか？

推古二十八年(620)、聖徳太子と蘇我馬子によって編集された『天皇記』、『国記』が、皇極四年(645)の乙巳(おつし、とも)の変(豪族の一人、藤原鎌足らは、宮中で有力だった蘇我入鹿を暗殺する)で焼失した、という『日本書記』の記述があるので、当時の歴史を紐解くための資料は、『古事記』(和銅五年714に成立)と『日本書記』(養老四年720に完成)とに限局される。

#### 三・三 仏教の伝来

仏教は、古くから連綿として渡来した人々によつて、私的崇拜として伝えられた。但し、『日本書記』には、百済の王が使者を遣わし、欽明天皇(二十九代)に対して、欽明天皇十三年(552)、仏像・経典とともに、仏教流通の功徳を称賛する上奏文を献上した、と記され、これを、国家間の公伝(公式伝来)とすることが一般的である。但し、その年次は、宣化天皇(二十八代)二年(538)との説もある。

敏達天皇（三十代）以降、用明、崇峻、推古天皇に仕えていた有力な貴族、蘇我馬子は仏教を崇拝していた。馬子は、同じく有力な軍事氏族で、強硬な排仏派として知られた物部守屋を攻め、彼を打ち取った。政治の実権を握った馬子は、崇峻天皇（三十二代）が自分を嫌っているとして、崇峻天皇五年（692）、部下に天皇を殺害させ、欽明天皇の皇女（蘇我馬子は母方の叔父に当る）を即位させた。

### 女帝の推古天皇（三十三代）は・・・

推古天皇元年（693）、甥の厩戸皇子（没後百年以上を経た、日本最初の漢詩集『懷風藻』に「聖德太子」と記され、平安時代以後には一般的な呼称としては「聖德太子」を皇太子として、摂行（職務を行わせる）させた。推古天皇は頭腦明晰、しかも公正な女帝として、厩戸皇子の才能を十分に発揮させる。『日本書記』によれば、推古天皇九年（694）、飛鳥から斑鳩（現・奈良県生駒郡斑鳩町）に移ることを決意した厩戸皇子は、宮殿の建設に着手して、同十三年には自ら斑鳩宮に移り住んだ、という。先立つ推古天皇十一年に、「冠位十二階」、同十二年には「十七条憲法」を制定して、法令、組織の整備を進めた。小野妹子を隋に派遣して仏法の興隆に努め、斑鳩の地に推古天皇十五年（697）、「法隆寺」を建立した（但し、『日本書記』には、天智九年＝570年＝に法隆寺は全焼したが、間もなく再建された、と記されている）。

法隆寺は、古代寺院の姿を現在に伝える仏教施設で、そのうち「西院伽藍」は、現存する世界最古の木造建築物群として、平成五年（1993）、ユネスコの世界遺産に登録された。氏寺や、多くの仏像がつくられ、貴重な工芸品、古文書をいまに残す。わが国最初の仏教文化として、「飛鳥文化」を花咲かせた。

### 三・四 「飛鳥寺」の建立

六世紀末から七世紀初めに掛けて現・奈良県高市郡明日香村に建設された「飛鳥寺」は、蘇我氏の氏寺である。推古天皇四年に発祥した、本格的な伽藍をもつ「法興寺」（＝仏法が興隆するとの意＝をもつ、日本最古の本格的寺院）の後身として、推古天皇十七年（699）＝但し異説有り＝、銅像の本尊（飛鳥大仏）が造立され、人々に尊崇された。天武天皇（四十代）の時代には、官寺（朝廷または国が監督・維持する寺院）と同等に扱うように、との勅が出された。

遺憾乍ら、「飛鳥寺」は火災などの災害に遭って、寺勢は衰えた。しかし、江戸時代後期には、篤志家によって同所に再建され、法灯は今も守られている。

### 三・五 飛鳥京跡地の発掘によって・・・

現・奈良県高市郡明日香村で発掘された「飛鳥京跡」は、大王および天皇の歴代の宮殿、官衙（官庁）、豪族の邸宅、寺院など、大和朝廷が支配していた拠点で、『日本書記』

などと照合すると、飛鳥岡本宮(630～636)、三十四代舒明天皇)、飛鳥板蓋宮(643～645)、三十五代皇極天皇、重祚して三十七代斉明天皇)、飛鳥淨御原宮(板蓋宮の跡地か、四十代天武天皇、四十二代持統天皇)の遺構であることが分かった。

### 大化の改新

推古天皇三十年(652)に厩戸皇子が死去したのち、豪族の蘇我氏の専横は甚だしく、その権勢は天皇家を凌ぐほどになる。豪族、中臣鎌足(なかとみのかまたり)(のち藤原氏の始祖として、藤原鎌足)らは、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)即位して三十八代天智天皇)とともに宮中で、大臣の官位をもつ、大和朝廷の有力者、蘇我入鹿を打つ(乙巳の変(いつし)前出)。

幸徳天皇(三十六代)は飛鳥の宮殿を難波に移し、天皇を中心とする政治の確立に努める。日本書記によれば、大化二年(656)に改新の詔を發布した(但し異説もある)。

### 三・六 白鳳文化が開花した・・・

天武天皇(四十代)の政策は、皇后に引き継がれる。女帝の持統天皇(四十二代)として即位し、飛鳥京の西北、現・橿原市に、首都として、本格的な唐風の都城(としじょう)が建設された。「飛鳥京」と同様に、近世になって、「藤原京」と呼ばれる。

この都では、仏教文化に加えて、律令国家成立期の息吹を感じさせる新しい貴族文化が成立した。このころ華開いた、天皇と貴族を中心とした大らかな文化は、「白鳳文化」といわれている。

天武天皇は、皇后の病氣平癒を誓願して、「薬師寺」(平城遷都のちに建立された「薬師寺」と区別して「本薬師寺」といわれる)を着工する。また、飛鳥時代の最大土族だった藤原氏の始祖、鎌足とその子息所縁の寺院として、天智天皇八年(669)、現・奈良市に所在する「興福寺」が建立された。世界遺産に登録され、代表的な興福寺の仏頭(ぶつどう)(国宝)が残されている。

### 「律令国家」の形成

大宝元年(701)、「大宝律令」が制定され、国家としての体制が整備される。律は刑法、令は行政法、訴訟法、民事法などから成り立つ。

ときの天皇は、四十二代文武天皇で、当時、断絶状態にあった「元号」の使用を再開した。以後、「元号」の制度は途切れることなく現在まで継続されている。

### 三・七 秩父市黒谷の遺跡から・・・

慶雲(けいうん)(きょううん、とも)五年(708)、武蔵国秩父郡から自然銅が発見され、朝廷に献上された。「和銅遺跡」は、現・秩父市黒谷に所在し、埼玉県指定旧跡となっている。

女帝の元明天皇(四十三代)は、元号を和銅に改元して、日本最初の流通貨幣の「和銅開

珎<sup>ちん</sup>」(かいほう、とも)が発行された。直径24mm前後、円形方孔の形式、中央には、一辺が7mmの正方形の穴が開いている。表面には、時計回りに和同開珎と表記されているが、裏は無紋。和銅元年(708)五月には銀銭が発行され、七月に銅銭の鑄造が始まって、八月に発行されたことが『続日本紀』に記されている。但し、銀銭は翌年廃止された。

### 三・八 平城京に移って奈良時代へ

和銅元年(708)、遷都の詔が発せられ、同三年、平城京(現・奈良県奈良市及び大和郡山田市)の建設が始まる。まず、内裏と大極殿などが建築され、施設は段階的な整備によって、仏教による鎮護国家を目指した。

#### 『古事記』、『日本書記』の成立

和銅五年、稗田阿礼<sup>ひえだのあれ</sup>の記憶を基にして、日本最初の歴史書、『古事記』が編纂される。また、天武天皇の皇子、舎人親王<sup>とねり</sup>の撰<sup>とねり</sup>によって、養老四年(720)、最初の正史として、神代から持統天皇(四十二代)の時代までが記された、『日本書記』が完成した。

### 三・九 国分寺の建立と大仏造立

聖武天皇(四十五代)は仏教に深く帰依し、天平年間に流行した疫病の災いから脱却するため、天平十三年(741)には詔<sup>みことのり</sup>を発して、各地(各国)に国分僧寺<sup>こくぶんそうじ</sup>と国分尼寺<sup>こくぶんにじ</sup>の建立

を命じた。現・東京都国分寺市西元町の「武蔵国分寺」は、その跡地が詳細に調査され、国の史跡に指定され、歴史公園として整備された。

同十五年、聖武天皇は大仏造立の詔を発し、同十九年、鑄造が開始され、難工事の末、天平勝宝四年(753)に大仏(東大寺盧舎那仏像<sup>ろしゃなぶつぞう</sup>)は開眼され、盛大に法要が行われた。続いて大仏殿の建設が始まり、天平宝字二年(758)に完成した。

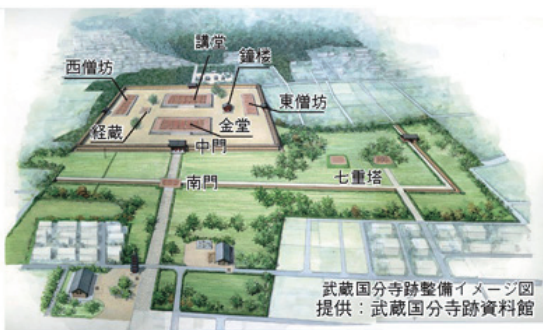
平城京を中心として貴族・仏教文化が華開き、聖武天皇の元号を取って、「天平文化」と呼ばれる。

### 三・十 『万葉集』の成立

七世紀後半から八世紀後半にかけて編集され、日本最古の和歌集が成立した(天平宝字三年以後か?)。ここには、天皇、貴族から下級官吏、防人<sup>さきもり</sup>(辺地を防衛する人)など、様々な身分の人が詠んだ歌が四千五百首以上収録されている。

### 奈良時代は八十四年・・・

女帝の孝謙天皇は聖武天皇の息女、四十六代の天皇(重祚して



四十八代称徳天皇)で、天平宝字八年(736)、藤原仲麻呂(太政大臣)の乱を鎮圧し、仏教重視の政策を推進する。

ついで、桓武天皇(五十代)は仏寺の肥大した影響を避けるため、延暦三年(785)、山城国乙訓郡(現・京都府向日市、長岡京市と京都市西京区)に「長岡京」を造営したが、さらに十年後の延暦十三年(794)、改めて平安京に遷都する。

### 三・十一 「武藏国」は・・・

七世紀のころ、律令制に基づいた地方行政区分によって、東山道、のち東海道の律令国として成立した。

#### 渡来人が移住

六〜七世紀の朝鮮半島では、大国の唐の影響下で政治状況が変化し、高句麗・新羅・百濟三国の人々が続々と日本に渡航した。彼らは先進的な技術をもち、半島での戦乱を避ける意味もあった。多くの渡来人は東国に移住させられたが、ついで、武蔵国に移された。移住した高句麗の王族高麗若光は、その地(現・日高町に当たる)の豪族として定住し、靈龜二年(716)、入間郡を割いて高麗郡が置かれた。日高町には奈良時代以前の遺跡は少なかったため、入間郡内の閑地だったと推測され、渡来人の集住は閑地開発を担ったもの

のようだ。

『続日本紀』(勅撰の歴史書で、七九七年に完成した)には、天平宝字二年(758)、「帰化新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人、移武蔵国閑地、於是始置新羅郡焉」と記され、朝廷が帰化人を武蔵国の閑地に移したことが、「新羅郡」の始まりとされている。

#### 新羅郡は・・・

今日の志木市・和光市・新座市・朝霞市の一帯であるが、のちに新座郡と呼び変えられた。入間郡の東端、豊島郡の北端に当り、当時は「閑地」で、居住する人々の無い地域だった。新羅人が移住して、開墾した土地は、今日まで「新倉」という地名を残している現・和光市「新倉」と和光市「白子」(新羅から転化したとする説がある)の地域とされている。しかし、志木市域への新羅人の移住は無く、志木市に集落は営まれなかったようだ。

### 三・十二 志木市内では・・・

古墳時代後期以降に拡散したと考えられる集落、特に中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡に、この時代の遺品が残されている。

城山遺跡では、平成八年に発掘調査された住居跡から、印面に「富」の一字が書かれた完形品の銅印が出土し、この住居跡からは、その他、須恵器杯や猿投産の緑釉陶器の破

片が出土した（「猿投窯」は現・愛知県名古屋市東部から豊田市西部、瀬戸市南部から大府市および刈谷市北部に集中する千基を越す古窯跡の総称で、食器などの高級品に限られ、平城京・平安京をはじめ、寺社・官衛・豪族などの支配層に供給された。また、「緑釉陶器」は、光沢のある緑色のガラス化した釉薬<sup>うぐ</sup>へうわぐすり、ともゞが表面にほどこされた陶器として知られる）。

平成二十〇二十一年の調査では、平安時代の住居跡から、皇朝十二銭の一つ、「富壽神寶」<sup>ふじゅんぼう</sup>が出土している。

田子山遺跡では、平成五、六年の発掘調査で、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡、土坑群が検出され、住居跡から、腰帯の一部である銅製の丸鞆<sup>まるもも</sup>（円い飾りのついた帯）が出土した。さらにカマド横の床面上からは、東金子窯跡群<sup>ひがしごねこやませきじん</sup>（埼玉県入間市所在、瓦や須恵器などを生産した）の前内出窯<sup>まえうちでかま</sup>の製品と鳩山窯（埼玉県鳩山町所在、製品の須恵器<sup>すゑき</sup>杯<sup>つぎ</sup>（お茶碗のようなお皿））が一点ずつ発見された。

### 三・十三 「竪穴式住居」は・・・

縦穴を掘って、その底に床<sup>ゆか</sup>をつくり、柱を立てて屋根を葺いた住居であるが、旧石器時代末から、縄文、弥生時代を経て、有史時代となり、平安時代ころまでの長期にわたって、数多くの遺跡で発掘されている。

地面を円形や方形に掘り窪め、その中に複数の柱を建てた。梁や垂木を繋ぎ合わせ、家の骨組みを作って、その上に、土、葦などの植物で屋根を葺いた建物だった。発掘された竪穴住居跡からは、各種の生活用具が出土するので、祖先の暮らしと生活の痕跡が詰まった貴重な遺産であることは勿論だが、遠い昔に廃棄され、その後経年変化を経ていることを忘れてはならない。

### 平地住宅、高床<sup>たかゆか</sup>の建物へ・・・

縄文時代中期の三内丸山遺跡<sup>さんないまるやま</sup>（現・青森県青森市所在）などから、祭壇として用いられたと見られている高床建築（掘立柱建築）の遺構が出土し、弥生時代には、穀物等を蓄える高床倉庫（鼠が入れないように、また風通しを良くした）も普及していた、と推測される。また、集落を統率する豪族は環濠をもつ建築群を構えていた。

### 但し、留意すべきこと・・・

平地住居や高床倉庫などの掘立柱建築は、地下に柱跡を残すだけで、竪穴住居のような地下の溝跡を残さない。発掘調査で見落されることがあり、平安時代まで、庶民の住居はすべて竪穴式だったとする見解には、疑問ももたれている。



桓武天皇（五十代）は、延暦三年、奈良の都を北方の山城国・長岡京に移した。さらに延暦十三年には、水利の優れた、現・京都市街に遷都した。平らかで安らかな都を目指して「平安京」と称せられる。平安京は、東西、南北、それぞれ五十キロメートルの区域をもち、唐の首都、長安に習って、碁盤の目状に整然と区画された。

遷都後の日本仏教は・・・

### 平安新仏教 最澄と空海

平安京に遷都後、入唐求法の還学生（日本に還って帰って来ることができる短期留学生）に選ばれた最澄は、延暦二十一年（892）、唐に渡った。同二十四年に帰国し、天台宗を開く。また、空海は、延暦二十三年（895）、遣唐使の留学僧として唐に渡る。長安に入って修行し、大同元年（906）に帰国して真言宗を開祖した。

新しい日本仏教の展開によって、平安時代の貴族層や都周辺の人々の信仰は拡大する。しかし、仏教の普及が庶民に及んだのは、鎌倉時代を経て、中世以降まで待たなければならなかった。

三・十五 平安時代の貴族政治から新しい国風文化が生まれる・・・

### 藤原氏と摂関政治

平安時代の初期（九世紀初め）には、豪族層に出自する士族が、貴族として力をもっていた。しかし、時代が進むに従い、天皇と婚姻関係を結んだ新興士族の藤原氏や源氏などが、急速に上流貴族層を占める。九世紀半ばには、藤原氏が摂政（天皇が幼少の折りなどに、その代理として政務を行う）、また関白（天皇が成人したのちに天皇を補佐する）となる（併せて摂関政治）。

### 「国風文化」の繁栄

平安時代の西国では、一般家屋も殆ど平地住宅に移行し、上流貴族は贅を尽した造りの住宅を構えた。貴族の住まいは「寝殿造」（中心の建物が南の庭に面して建てられ、付属的な建物は廊が繋がれた。九世紀に建設された「東三条殿」は代表的）となり、「大和絵」は自然を描き、絵と物語りで構成される「絵巻物」が作られる。「仮名文字」によって、感情を生き生きと伝える国文学が続々と著される。和歌が公の場でもてはやされる。

三・十六 「荘園」の発祥は・・・

八世紀とされるが、九世紀になると、貴族、大社寺は、農民が自ら開墾した土地を買収して所有地を増やし、初期の本格的な「荘園」が形成された。十世紀に入ってから、地方の政治が乱れると、成長した豪族や、「荘官」（荘園の領主から現地の管理を委ねられたもの）などになった有力な農民は、荘園を守るために武装して闘争を繰り返す。



やがて「武士」が発生して「武士団」をつくる。大きな武士団へと成長し、「桓武平氏」(桓武天皇の賜姓による)、「清和源氏」(清和天皇を祖とする)は特に有力なものとなる。

### 三・十七 平将門まさかどの乱は・・・

十世紀中頃に起こった武士の反乱である。将門は、平氏の姓を授けられた高望王の孫、桓武天皇の五世に当る武士で、下総国、常陸国に広がった平氏一族の抗争は、関東諸国を巻き込む争いとなる。天慶二年(939)に常陸・下野・上野の国府を占領し、関東を支配下に置いて新皇を称した。しかし、翌年には、平貞盛たいらのさだもり、藤原秀郷ふじわらのひでざとらに討たれた。

### 前九年の役と後三年の役

十一世紀後半になると、東北地方で「前九年の役」(永承六年 $\wedge$ 1051 $\vee$ 、康平五年 $\wedge$ 1062 $\vee$ )、「後三年の役」(永保三年 $\wedge$ 1083 $\vee$ 、寛治元年 $\wedge$ 1087 $\vee$ )が起こる。これを鎮圧したのは、源頼義・義家(八幡太郎)の通称で知られる)の父子で、関東の武士の信望を高め、東国で勢力を伸ばした。

### 「院政」が始まる

平安時代の末期には、天皇の地位を退いた太上だいたう(「だいじょう」とも)天皇が引続いて政務をとるようになる。白河天皇(七十二代)は応徳三年(1086)、堀河天皇に譲位ののち、院庁を開いて引き続き政権を担当した。これを「院政」といい、天皇が位を引いてからは、「上皇」という尊称で呼ばれた。上皇は、源氏と平家の武士団に身辺の警護をさせ、また、荘園の寄進を受けた貴族や武士を保護したので、荘園は上皇の許に集まり、しかも、荘園は、上皇が信仰する寺社にも寄進されたため、それらの寺社の勢力は強化された。

### 三・十八 武家社会の成立へ

「院政」の下で成長した武士は、東国で源氏が勢力を広げ、対する平家は西国で活躍する。清和天皇(五十六代)は、諸皇子に源姓を賜り(「賜姓しやくせ」)、第六皇子貞純親王の皇子経基つねもと王の系統は、名門、清和源氏として各地で繁栄した。また、河内国を勢力下にした河内源氏の二代目、頼義は、長男の義家とともに、東北地方の戦乱で安倍氏を打ち、戦功を挙げ(既述)。また義家の孫に当る源為義は、摂関家の内紛から勃発した「保元の乱」(保元年 $\wedge$ 1156 $\vee$ )では、崇徳上皇すくとく(七十五代天皇)側の指揮官となる。一方、為義の長男の義朝は後白河天皇(七十七代)側の指揮を取ったので、父子対決の場面となる。



後に義朝の子の頼朝は鎌倉幕府を開き、ついで活動する新田・足利などの名門諸氏は、何れも清和源氏の流れに入る。

為義・義朝父子の相克によって大きな痛手を負った源氏に対して、平家の総帥、清盛は、保元の乱で義朝と共に崇徳上皇側の指揮をとったのち、急激に勢力を伸ばす。平治元年(1160)、今度は、源義朝が平清盛を打倒すべく、公卿の藤原信頼と結んで挙兵した。しかし、義朝と信頼は殺害され、平氏政権が成立する(「平治の乱」)。

### 桓武平氏の流派は・・・

平氏は、皇族が臣下に下る(臣籍降下)さいに名乗る氏の一つで、桓武天皇(五十代)の子孫となる「桓武平氏」ほか、四つの流派が知られている。その中で、武家平氏としての活躍が顕著なのは、高望王流・坂東平氏(坂東)は東国のこと、王は東国に下向した)の流れである。高望王は、桓武天皇の第三皇子・葛原親王の三男・高見王の子で、賜姓を受けて「高望」となった。高望王の長男、平国香の孫、維衡から始まる一族は、本家の坂東平氏に対して庶流となる「伊勢平氏」だが、北面武士(上皇の身辺を警護)となった平正盛の系統(六波羅流・六波羅家)は「平家」と呼ばれることがある。正盛の子、忠盛は初めて昇殿を許され、忠盛の子清盛は平氏政権を樹立して栄華を誇った。

### 平清盛は・・・

平治の乱で対立する勢力を一掃し、後白河上皇の信任を得る。内大臣を経て、仁安二年(1192)、太政大臣となるが、間もなく辞任し、表向きには政界から手を引く。

翌年、清盛は病いに倒れて出家するが、病いが癒えると、福原に別荘を造営する。後白河院との関係は友好的に推移して、国内に五百余の荘園を保有するとともに、瀬戸内海の航路を整備して、宋との貿易を盛大に行なったので、莫大な財貨を手に入れ、「平氏にあらずんば人にあらず」といわしめた。

そのころ、後白河院は福原に清盛を訪れ、娘の徳子が、高倉天皇の中宮(天皇の妻たち)として入内(内裏)天皇の御所に入ることにするようになる。一門挙つて公卿・殿上人として、官職を独占するが、鹿ヶ谷事件(平氏討伐の密議の発覚とされているが、異説もある)を契機として、後白河院との対立が深まり、治承三年(1173)、清盛は、院を幽閉して政権を掌握する。

一方、強権をもつて朝廷の政治に介入したため、貴族、寺社、地方の武士たちの平家に対する反感は急激に増大し、ついに翌・治承四年、以仁王(後白河天皇の第二皇子)を奉じて源頼朝ほか兵を挙げ、東国一帯はその支配下となる。

初めて武家政権を樹立した平清盛は、治承五年閏二月、熱病で死没した(六十四才)。

源頼朝から遣わされた頼朝の異母弟、義経は一の谷、屋島で平家を打ち、元暦二年／寿永四年（1185）、壇の浦で平家を滅亡させた。

### 鎌倉政権の確立

全国の軍事的な支配に成功した頼朝は、鎌倉の地を本拠として武家政権を確立、その後、建久三年（1192）、征夷大將軍に任命される。

### 三十九 秩父氏一族の繁栄・・・

群雄が割拠していた武蔵国で、垣武平氏の流れを汲む秩父氏一族は、地方豪族として勢力を誇り、畠山氏、河越氏、豊島氏、江戸氏などを派生し、それぞれ畠山郷（現・埼玉県深谷市あたり）、入間郡（現・川越市あたり）を治め、豊嶋郡（現・埼玉県南部から豊島区にかけて）、江戸郷を治め、荒川、入間川に沿って活動した。

### 河越氏は河越に荘園を開く

河越氏が、現・川越市上戸の台地に立荘したのは、永暦元年（1160）のころと伝えられている。それに先立つ保元の乱で、河越重頼は、源義朝に従って上洛した。保元元年（1160）七月、重頼は弟の師岡重経とともに源義朝の陣営に加わった。『保元物語』では、河越・師岡氏を「高家」と称している。高家とは、格式の高い、権勢のある家柄をもつ由緒正し

い家、名門のことである。

平治元年十二月（1160）、平治の乱で義朝が滅びたのちは平家に従い、平家を介して所領を後白河上皇に寄進、新日吉社（現・新日吉神宮）領として河越荘が開かれた。本家（宗家ともいい、土地の所有者）を新日吉社、本所（実効支配権をもつもの）を後白河院として、河越氏はその荘官（荘園の管理を委ねられたもの）となる。

### 河越重頼は何故、源氏の惣領を援護したのか・・・

源義朝の子、頼朝は、平治の乱後の永暦元年、東国伊豆に流罪となったのであるが、その乳母比企尼は、彼を援助するために武蔵国に下向した。河越重頼は比企尼の次女（河越尼）を妻に迎えたので、以後二十年余りにわたって頼朝と近しい縁故が生じた。そこで平家に従いながらも源氏と深い繋がりをもつことになる（『吾妻鏡』寿永元年十月十七日条）。

比企尼は、武蔵国比企郡の代官（所領の政務を代行する職）を務めた、比企掃部允の妻で、三人の娘は、源頼朝に近い人々に嫁ぎ、嫡女が再嫁した相手の安達盛長は頼朝の側近となり、次女は武蔵国の有力な豪族だった河越重頼、三女は伊豆国の豪族伊東祐清に嫁いだ。比企尼は比企郡から頼朝に米を送り続け、三人の娘婿にも頼朝への奉仕を命じたという。長女と次女の娘は、それぞれ頼朝の異母弟・範頼と、同じく頼朝の異母弟・義経に嫁いだ。

が、男子に恵まれなかつたため、比企氏の家督は甥の比企能員を養子にして跡を継がせた。後に能員が頼朝の嫡男・頼家の乳母父となつて権勢を握つたのは、この尼の存在が大きかつたようだ。尼の次女と三女も頼家の乳母となつてゐる。

### 三・二十 武家政治の成立に向つて・・・河越氏の不滅の貢献

河越重頼は平氏として、畠山重忠、江戸重長とともに、治承四年(1180)の八月、三浦氏が抛る相模衣笠城を攻略したが、十月には「長井の渡し」で、頼朝に降伏してその配下に入るといふ、平家から源氏へと変転を余儀なくされた。

安房国で再起した源頼朝が隅田川を渡り、鎌倉に向かう途上のことであり、河越重頼の行動は、武家政治への歴史的なキー・ステップとなつた。

#### 河越重頼の光と影Ⅱ重頼は娘を源義経に嫁がせる・・・

重頼は武蔵国留守所総檢校職の地位を得、武蔵国入間郡「河越館」の武将として勢力を伸ばしたが、源頼朝の命令によつて、元暦元年(1186)、自らの娘を上洛させ、弟に当る義経に嫁がせた。頼朝は鎌倉八幡宮の社前で、自ら仲人となつて婚礼を挙げたが、義経本

人は知らず、西国に在つて不在だつたといわれ、重頼親子の悲劇の始まりとなる。

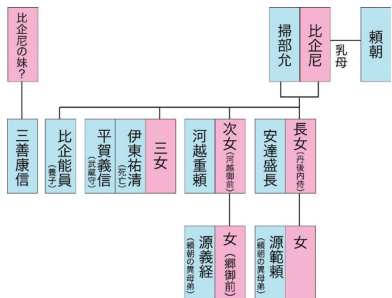
義経の正室となつた女性の名は、伝承では郷御前ごごと呼ばれてゐるが、故郷の河越(現・川越市)では、京に嫁いだ姫なので、「京姫」と呼ばれ、また終焉の地である平泉では、貴人の妻の敬称である「北の方」と呼ばれてゐる。

#### 河越重頼父子は戦う

同年、元暦元年の一月、河越重頼、嫡男重房らは、源義経軍について義仲軍を破る。重房は義経の側近として『平家物語』にもその活躍が描かれている。院の御所六条殿を警護し、二月、河越重頼、重房らは義経に従つて平家を追討し、一の谷で平家を破る。五月、源頼朝は、義仲の子志水義高の残党討伐のため、河越重頼らを信濃に派遣した。

#### しかし頼朝に誅殺される

その後頼朝と義経が対立すると、事態は一変、義経の縁戚であることを理由として重頼・重房父子は誅殺され、武蔵国留守所総檢校職の地位も、秩父氏一族の畠山氏、重能の子の重忠に奪われた。文治元年(1185)十一月、河越重頼の領地は没収され、同三年二月、義経は妻であつた重頼の娘、子らを伴い、奥州平泉藤原秀衡ひでむねの許に向かう。重頼、重房が誅されたのは、その年十月との記録が残されてゐる。



文治五年（1126）四月、藤原泰衡は、奥州衣川館に義経を襲撃する。義経（三十一才）は、妻（二十二才）、子（四才）とともに自害した。

その後の河越氏は・・・

一時期衰退したが、河越荘の所領は子孫代々が継承し、重頼の三男・

重員は、嘉禄二年（1312）、鎌倉政権から武蔵国留守所総検職に補され、

武蔵国での地位が復活した。河越氏は重要な役職を与えられ、鎌倉時代から戦国時代末まで豪族として勢力を誇った。河越経重は、文応元年（1260）に館内の新日吉山王宮に梵鐘を奉納し、文永九年（1272）には高野山の町石を奉納したとの記録がある。

三・二十一 鎌倉時代は・・・

鎌倉に本拠を構築した、源頼朝の活動によるが、建久十年（1199）に死去する。その子、頼家が跡を継いだが、母親の「北条氏」を執権（政権を援助しつ、政務を統括する）とする政治へと変貌する。やがて、政権に反抗する新田義貞は、北方より「鎌倉街道」を進撃して鎌倉に向かい、元弘三年（1333）、稲村ヶ崎を突破した。

三・二十二 室町時代へ・・・

後醍醐天皇（九十六代）の建武の新政から始まる「南北朝時代」を経て、建武二年（1335）、

足利尊氏に征夷大將軍が宣下され、足利一族によつて創建された邸宅は、京都に広大な敷地をもち、室町通りに面して正門が設けられた。「室町殿」、あるいは「室町第」と呼ばれる（また、通称は「花の御所」）。しかし、八代將軍の義政が、政治を疎んだために起こった内乱は十年に及び、都は壊滅的な被害を受けた（「応仁の乱」と呼ばれる。応仁元年（1467）～明九年（1477））。

三・二十三 「宗岡」が初めて文書に記録されたのは・・・

およそ五〇〇年前（十五世紀末）のことになる

巡歴の高僧、道興准后は、文明十八年（1486）、北陸路から武蔵国に入り、各地を廻つて紀行文を著した。その書『廻国雜記』には、各地の地名を読み込んだ和歌や漢詩が収められているので、その足跡を辿ることができる。

当時の地名には、いまでも使われているものがあるので、道興は志木、新座、朝霞各市を廻つたことが明らかであり、そのとき目で見て感じたことを詠んでいるので、当時の風景を生々しく蘇らせ、そのリアリティーは極めて高い。

聖護院門跡が廻つた中世の道

新座郡を周遊

道興は武州十玉坊（所在地については後述）を拠点として、朝霞・新座・和光・志木各市



源頼朝木像（信濃善光寺蔵）  
文保三年（1319）の銘あり

を含むかつての新座郡を訪ね、歌を詠んだ。

文明十八年の秋、志木市域の宗岡に赴き、

むねおかといへる所を通り侍りけるに、夕の煙を見て、

夕けぶりあらそう暮を見せてけりわが家々の宗岡の宿

夕食をつくる煙が、あちこちから争うように立ちのぼる様子を詠った。

賑やかな宿場では無いが、集落ができていたことは確かだ（現在。上宗岡の千光寺近くに、この歌碑が建てられている）。

新座市域では、

また、野寺といへる所ここにも侍り。これも鐘の名所なりといふ。この鐘、古へ国の乱れにより、土の底に埋みけるとなむ。そのまま掘り出さざりければ、

音にきく野寺をとへば跡古りてこたふる鐘もなき夕かな

片山の野寺の鐘で知られた八幡社は、明治末期に近在の神社と合祀されて、現在は武野神社となっている。

野火止塚は、新座市内の古刹「平林寺」の境内にあるが、同寺が建立される以前だった。此のあたりに野びどめつかという塚あり。けふはなやきそと詠せしによりて、烽火忽ち

やけとまりけるとなむ。それより此の塚をのびどめと名づけ侍るよし、国の人申し侍りければ、

わか草の妻も籠らぬ冬されにやがてもかる、野火止の塚と詠んだ。

朝霞市、膝折と浜崎を訪ねて・・・

これをすぎて、ひざおり（膝折）といへる里に市侍り。暫くかりやに休みて、例の俳諧を詠じて、同行に語り侍る。

商人はいかで立つらむ膝折の市に脚氣を売りにぞありける

膝折は、江戸時代には川越街道の宿場だったが、それ以前、室町時代から市がたつていたことが分かる（歌の中の「かつけ」とは、竹で編んでつくった茶碗などを入れる脚つきの籠をさし、正しくは「脚籠」と書く。道興准后は、脚の病の「脚氣」と、売り物の「脚籠」をかけて、「膝を折るといふ地名の市でかつけへ脚籠」という籠を売っている商人は、かつけへ脚氣」という脚の病にかかって、どうやって歩くのだろう」と戯れ歌をつくって楽しんだのであろう）。

旅に出て半年が過ぎ、道興准后は武蔵国で正月を過ごした。

武蔵野の末に浜崎といへる里侍り。かしこにまかりて、

武蔵野をわけつ、ゆけば浜崎の里とはきけど立つ波もなし



細田千虎さんが描いた「宗岡の夕べに立つ煙」



武蔵野の草を分けながら、浜崎という名の地に向かったが、波が立つ浜などなかったという意味の歌だ。

三・二十四 都を旅立った道興は・・・

北陸道を通って越後国に至り、そこから南下して関東に入ったのであるが、武蔵国には四回にわたって出入りを繰り返している。大塚の「十玉坊」で長旅の旅装を解き、越年して、この間に武蔵野の名所・旧跡を訪れたようだ。

通った路を推定すると、相模から武蔵国の霞の関（現・多摩市）を経て多摩川を渡り、恋ヶ窪（現・国分寺市西恋ヶ窪）あたりは、鎌倉街道の上道を利用しているようだ。狭山市「掘兼の井」から「やせの里」、「入間川」に立寄り、「佐西の観音寺」に着く。柳瀬川に沿って、宗岡（志木市宗岡）を往復、また「河越」（現・川越市）の常楽寺を訪れている。

中世という時代は・・・

古代より後、そして近世よりも前の時代を指す。一般的には、平氏政権の成立（1183年ころ）から安土桃山時代（戦国時代末期）までをいう。

聖護院門跡は・・・

歴史上の人物の中には、多くの人たちには全く知らされていないが、知ってるひとにとつ



聖護院門跡道准后が辿った道  
今も変わらぬ名前の「新座郡のまち」

ては、きわめて大きな存在の人がいる。並外れた貴族、「道興准后」はそうした一人だ…と安斎達雄氏は述べている（本紙16号）。

この人、道興の勢威は並のものではなかった。彼は関白、のちには太政大臣となった近衛房嗣このえふさぐの次男として、永享二年（二〇〇）、摂関家に生誕した。幼いころ出家し、やがて聖護院門跡しょうごいんもんせきとなった。

聖護院とは、聖体（天皇）護持の寺というところから付けられた名で、門跡とは、皇族や上級貴族が入る特定の寺、またその寺の統括者につけられた呼称である。このころ聖護院門跡は修験道の本山派を統括する地位にあり、その後、園城寺おんじょうじ（三井寺）の長吏ちやうり、熊野山くまのおよび新熊野の檢校けんぎょうをも兼ねた。寺院の職名は宗派などによつて異なっているが、長吏も檢校も寺の代表者と考えてよい。

皇后などの三后に準ずる待遇の「准后」となつて・・・

道興はさらに大僧正に任じられ、准后となつた。これ以後、道興は「道興准后」と書かれるようになる。准后とは太皇太后・皇太后・皇后の三后に準ずる待遇を与えられた人のことである。戦乱が相次いだこの時代、経済的な恩典はほとんどなかったと思われるが、大変な名誉であることには変わりはない。道興准后は天皇家の信任が厚かったが、それだ

けではない。室町幕府の八代將軍足利義政よしまさお抱えの護持僧ごじそうも務めていた。足利義政といえど、東山文化を代表する銀閣（国宝。世界遺産にも登録）をつくつた將軍である。武家政権との固いぎずなも持っていたのである。

八代將軍足利義政の跡目をめぐつて、その弟義視よしみと実子義尚よしひさの相統争いに胆を発した応仁の乱（1467～1477）は、有力な大名の家督争いとも複雑に連動して十一年も繰り広げられ、京都を焼け野原にした。乱は一応の終息をみたものの、時代は本格的な戦国乱世に向かいつつあり、それは武蔵国とて同様であつた。

道興准后が諸国巡歴の旅を始めたのは、そうした最中の文明十八年（1486）六月中旬のことである。年齢は五十七才だつた。

『廻国雜記』は、長い間著者が不明であり、入手も困難だつた

江戸初期には、連歌師宗匠の宗祇が著したもの（『宗祇廻国雜記』）とされた。しかし、文政八年（1825）、関岡野洲良せつかみや（1772～1832）が『廻国雜記標註』を刊行し、その序の中で、この書の内容に直結する古文書が『白川古事考』所載のものと一致すること、甲斐国妙法寺の記録の、文明十九年の条に聖護院が甲州・武州より奥州に下つたと記されていることを挙げて、この書の作者は道興であることを証明した。

また幸いにも、塙保己一が編集した国文学・国史を主とする叢書の『群書類従』に掲載されたため、本書の存在が明らかになった。

塙保己一は延享三年に生まれたが、幼くして失明した。しかし学問の世界に果敢に挑戦し、古書の散逸を危惧して安永八年、菅原道真を祀る北野天満宮に刊行を誓い、江戸幕府や諸大名・寺社・公家などの協力を得て、古書を収集、『群書類従』を編集した。膨大な叢書で、古代から江戸時代初期までの史書や文学作品、一千二百点余りを収め、寛政五年(1793)〜文政二年(1819)、木版で刊行され、史学・国文学等の研究に、計り知れない貢献を齎した。

道興は風流な旅をしたように受けとられるが・・・

『廻国雜記』の本文は、道興自身の旅の覚え、歌などを記す日記となっていて、彼が風雅の道に精通し、詩文・和歌・連歌などにも長じていたことを読者に強く印象づける。しかし、その冒頭に、「文明十八年六月上旬の頃、北征東行のあらましにて、公武に暇の事申入れ侍りき。おのおの御対面あり」とあり、『御湯殿上日記』や『後法興院日記』にもその旅が、聖護院門跡の公的な旅であることが書かれているのである。

眺望が優れた大石氏の館(現・志木市柏町に所在した「柏の城」)に招かれて・・・

ある時大石信濃守といへる武士の館にゆかり侍りて、まかりて遊び侍るに、庭前に高閣あり。矢倉などを相かねて侍りけるにや。遠景勝れて、数千里の江山眼の前に尽きぬともほゆ。あるじ杯取り出して、暮過ぐるまで遊覧しけるに、

一閑乗興屢登楼 遠近江山分幾炎

落雁斗霜風颯々 自沙翠竹斜陽幽

興に乗じて高楼に登り、遠近の山河が幾つもの国を区切っている様子を見たのである。恐らく丹沢や奥多摩や奥秩父、さらに遠く筑波や上州の山まで見えたのではないだろうか？

河越といへる所に到り、最勝院といふ山伏の所に一両夜やどりて、限りあればけふわけつくす

武蔵野の境もしるき河越の里

此の所に、常楽寺といへる時宗の道場侍る。

ところ沢とへる所へ遊覧に罷りけるに、福泉といふ山伏、観音寺にてささえをとり出しけるに、薯芋といへるもの肴にありけるを見て、俳諧、

野遊びのさかなに山のいもそへてほり求めたる野老沢かな

大石氏の館に再び招かれて・・・

野遊のついでに、大石信濃守が館へ招引し侍りて、鞠など興行にて、夜に入りければ、二十首の歌をすすめけるに

(中略)

大石信濃守、父の三十三回忌とて、さまざまの追善を致しけるに、聞き及び侍りければ、小経を花の枝につけて贈り侍るとて、散りにしはみそち三年の花の春けふこの本にとふを待つらむ

昔からジゴク谷と呼ばれていた「十玉坊」は……

道興准后が逗留したところで、現・志木市幸町に所在し、十玉が訛つてジゴクと言ひ做わされたのではないか、神山健吉の証拠をもった意見である。そのころ、全国の修験(山伏)の有力な拠点だった、と彼は主張する。

三・二十五 八王子から志木に向かつて城館群を構築した大石信濃守の謎に迫る!

彼が大石信濃守の館に招かれたとき、繰り広げられた華やかな宴の有様を、この書の中の漢詩を通して、垣間みることができ、また

道興を招いたのは大石信濃守と記されているが……

その人は、当時武蔵国の管理を任された守護代(守護の下の役職)、信濃大石家十一代、

大石顕重と推測されている。何故なら、道興が訪れたとき、顕重は戦死した父の三十三回忌の供養を依頼したというが、父は、分倍河原の戦い(足利成氏の率いる鎌倉公方勢と上杉顕房の率いる関東管領勢との間で行われた合戦)で亡くなった房重であろう。そのとき道興は冥福を祈る歌を添えて花一枝を贈った、と『廻国雑記』には記されている。

残された系図によれば……

大石氏は、信濃藤原氏の後裔と伝えられる。系図の一部の信憑性に疑いもたれているが、木曾義仲を祖先として信濃国佐久郡大石郷に住んだことから、大石氏を名乗ったようだ。大石氏は本抛の信濃から次第に武蔵へと移って、七代信重は関東管領山内上杉憲顕に任えた。延文元年(1356)戦功によって入間・多摩両郡の柳瀬川流域を含む十三郷を与えられた。武蔵国の目代(国の行政官の代理国司)に任命され、また至徳元年(1384)には浄福寺城(現・八王子市下恩方町)を築城したとも伝えられている。系図では、石見守憲重、憲儀、十代目の房重につづく十一代の当主が信濃守顕重となる。



大月隆著『廻国雑記』(発行…「文学同志会」、明治三十三年)の表紙から

次号の「大石氏館跡」につづく